



第 55 回 トンボさんと遊覧飛行？

「トンボとは何か？」

印刷原版の四隅の印？ それともグランドを整備する道具？

いえいえ、今回取り上げるのは生きている昆虫のトンボです。

トンボ類は蜻蛉（せいれい）とも呼ばれ、翅をもつ昆虫の中でも、比較的初期に現れた原始的なタイプです。原始的な点を挙げると、例えばハチのように翅を後方に揃えて畳めず、左右に広げるか、背中合わせに閉じて休息する点。幼虫であるヤゴからサナギを造ることなく成虫へと羽化する点（不完全変態）などです。

幼虫のヤゴも成虫のトンボも肉食で、大きな顎をもち、よく見るとちょっと強面。特に成虫はイネの害虫や蚊を食べてくれます。日本人はトンボをありがたく思い、親しみを感じてきました。そして子供たちはトンボを捕まえるのが大好き。捕中網や素手でトンボを捕まえた思い出、ありますよね？

「トンボの飛翔力」

トンボ類はその四枚の羽根を操り、見事な飛行を行います。グライダーのように滑空したり、まるでヘリコプターのようにホバリングしたりと、自由自在で獲物を狩るのに好都合。前後4枚の翅は、先に後ろが羽ばたき、次に前翅がそれを追うように動くのだそうです。

でもトンボの外形を改めて眺めてみると、空を飛ぶくせにどこも流線形をしていません。翅を触ってみるとざらざらしたり、淵にギザギザがあったり。これも原始的だから？

いえいえ、秘密はトンボが小さい昆虫だから。

彼らの身体の大きさでは、空気の粘り気の影響が強くなります。液体の中を泳いでいるのに近く、その条件では、ギザギザの翅の方が効率が良いのだそうです。さらっとした空気中を滑空するというよりは、ハチミツの中を泳いでいるイメージだと。

飛翔が得意なトンボですが、実は成虫は歩くのは苦手だそうです。棒の上などをほんの少し移動するのにも、飛んで移動しようとしてます。そう言えば、トンボがシャカシャカ歩いて進む光景なんて、見たことがありませんよね？ その代りに6本の細い肢は高速で飛びながら空中で獲物を捕まえるのに役に立つのです。これはお見事。

「秋の風物詩？」

トンボと言えばアカトンボ。複数の種類がそう呼ばれますが、代表的なのはアキアカネ（学名は *Sympetrum frequens*）ですよね。真っ赤な体が印象的で、夕焼けにもよく映えますね。彼らは夏の間、比較的高地で暮らしていますが、秋には群を成して平地に降りてきます。沢山のアキアカネの群れが同じ方向へ次から次へと飛んでいく姿は、どこか神秘的です。この光景は都心のビルの屋上でも良く見ることが出来ます。群れはビルの4階以上の高いところを飛んでいるので、地上を歩いていると、意外に気付かなかつたりするのです。

「ヒトにとってのトンボ？」

古い時代の日本ではトンボのことを「秋津（アキツ）」と呼んでいたそうです。

古事記には、古代の日本を蜻蛉島（あきつしま）と呼んだとの記録もあるようです。

要するに日本はトンボの国だと。戦国時代の武士にも縁起のいい「勝ち虫」として好まれ、武具等の装飾に盛んにトンボがデザインされました。

幼虫のヤゴは水中ですごし、成虫のトンボは飛翔しながら獲物を狩る。稲作が盛んな日本で、トンボたちは水田の環境に適応し、数を増やしていったのでしょう。そして最も親しまれる昆虫のひとつとなったわけです。世界には5000種のトンボが知られていますが、日本には200種も生息しているのだそうです。

まさにアキツの国。

それに比べて、トンボは英語ではDragonfly。西洋ではドラゴンの名の通り不吉な虫とされているそうで、どちらかと言えば嫌われ者。不思議ですね。

「ヤンマを忘れてはいけませんね。」

トンボと言えば、忘れてはいけないのが大きなヤンマの仲間。

特に「オニヤンマ： *Anotogaster sieboldii*」は絶大な人気があるでしょう。体長は大きなもので10cmを超え、これも肉食。大きなメタリックグリーン複眼が輝き、他のトンボとは迫力が違います。漢字で書けば「鬼蜻蜓」。うわ、強そう。

実際、あのスズメバチを食べてしまうシーンも目撃されているとか。

他の小さなトンボ類を捕まえる時は、捕虫網をもって散策し、見つけたらその場でアタックするのが王道。空振りしたら逃げてしまうので残念。

でもオニヤンマの雄はなわばりを持ち、用水路の上など、一定の経路を巡回しています。

つまり網を空振りしても、待っていれば同じところにまたやって来ると。

小学生の頃、この「待ち伏せ作戦」で、オニヤンマをゲットした時の喜びはどれほどだったか。養殖で売っている、ひ弱なカブトムシにありがたみなどありませんが、俊敏な完全野生のオニヤンマは数も少なく、子供にとっては貴重な存在だったのです。

「オニヤンマよりかなり??？」

さて、トンボの仲間は3億年ほど前に地上に出現しました。その頃は空気中の酸素が35%もあり（現在は20%）、節足動物の簡単な呼吸器官でも効率が高くなるため、トンボ類だけでなく、ヤスデやクモのような節足動物からも巨大なものが現れました。そのなかでも有名なのは、原蜻蛉目（原トンボ目）に属するメガネウラ (*Meganeura*) でしょう。その大きさをや、左右の翅をひろげるとなんと75cm！！信じられない大きさです。オニヤンマさえ仔虫に見えてしまいます。実物大の復元模型を見ると、思わず一歩引いてしまう迫力。実際、メガネウラは史上最大の飛ぶ節足動物なのだそうです。

オニヤンマが飛んできたら、喜んで網を構えるところだけれど、翼幅75cmのメガネウラがこっちに飛んできたら？ きゃあと叫んで逃げ出してしまいそう。

アキツの国に住むそのあなた。メガネウラに向かって、指をくるくる回す勇気がありますか？ なんてね。ぴよぴよ？